

「戦後ゾルゲ団」「第二のゾルゲ事件」の謀略？

一橋大学名誉教授・早稲田大学客員教授（政治学） 加藤 哲 郎
katote@ff.ij4u.or.jp

1 ゾルゲ・尾崎処刑70周年にあたって 「上海ゾルゲ団」、戦後情報戦に注目を

報告者は、今春『ゾルゲ事件一覆された神話』（平凡社新書）を刊行した。冷戦崩壊後に世界で現れたゾルゲ事件についての新資料・新事実・新研究をトレースし、現段階で残された謎を、改めて提示した。その中心的主張の一つは、ゾルゲ事件とは太平洋戦争前夜、日本特高警察による 1941 年のリヒアルト・ゾルゲ、尾崎秀実らの逮捕とその後の裁判記録に出てくる日ソ戦回避のための「東京ゾルゲ団」の諜報活動に留まるものではない、ということである。1930-32 年末には、「上海ゾルゲ団」があった。事件が知られるようになったのは、日本敗戦後のことである。それも当初は尾崎秀実の反戦平和運動としてであったが、米国占領軍 GHQ/G2 ウィロビー将軍らが事件を再調査し 1949 年「ウィロビー報告」を発表、ソ連と国際共産主義運動の陰謀の戦後への継続を大々的に宣伝して、当時の米国マッカーシズムと東西冷戦の情報戦に用いようとした。

その結果、その後のゾルゲ事件の事実解明と研究は、冷戦の影を帯びざるをえなかった。米国とソ連の双方から「Intelligence の必要性」を強調する教材として恣意的に構成され、「20世紀最大のスパイ事件」と語られるまでになった。その副産物として、日本では特高警察が仕掛け米軍が作為した「伊藤律発覚端緒説」が長く通説とされた。また米国・ソ連・日本・ドイツ・中国など、当事国のゾルゲ事件への注目点は大きく異なって展開した。

今年 2014 年は、1944 年 11 月 7 日にゾルゲ・尾崎が死刑に処されて70周年になる。私の『ゾルゲ事件』は、昨年 9 月上海での国際シンポジウム報告を踏まえたものであったが、今回のシンポジウム

では、中国、ロシアからの専門家を迎え、昨年クローズアップされた 1930-32 年の上海におけるゾルゲ諜報団の活動が、いっそう明らかになるであろう。私自身は、『ゾルゲ事件』で、上海においてゾルゲに尾崎秀実を紹介したのは、日本の死刑判決文やウィロビーらの言うアグネス・スメドレーではなく米国共産党員鬼頭銀一であったこと、上海におけるゾルゲの活動は、上海のドイツ人ネットワーク、周恩来・潘漢年らの中国共産党中共特科、陳翰笙ら欧州で学んだ中国共産党員によって支えられ、これまで未解明の「上海ゾルゲ団」が重要な役割を果たしたことを述べた。

この点で、今回ロシアから来日するミハイル・アレクセーエフ氏は、現在日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』に日本語訳を連載中の『あなたのラムゼイ リヒアルト・ゾルゲと中国におけるソ連軍事諜報機関 1930-33』において、ゾルゲが上海時代にモスクワに送った交信記録・報告類の多くを初めて本格的に紹介・分析し、当時のソ連側のゾルゲ評価を明らかにしたのは、大きな功績である。日本との関わりでは、米国共産党から派遣された鬼頭銀一が「上海ゾルゲ団」の一員であったことがロシア側研究で初めて確認された。

ただし、上海における鬼頭銀一の役割については、ゾルゲが彼の活動に不満を持ち、満州事変勃発時に鬼頭が日本共産党員木俣豊次の治安維持法違反逃亡幫助で日本の領事館警察に検挙され、ゾルゲがそれに機密漏洩の危機感を抱いた報告は出てくるが、1941 年ゾルゲ検挙時の手記を史実として採用し、尾崎の異なる供述と照合していないため、ゾルゲに尾崎を紹介したのは鬼頭ではなくアグネス・スメドレーとされ、尾崎が日本帰国後も大阪・神戸で鬼頭

と連絡をとっていた事実が看過されている。また、尾崎とスメドレーの関係についても、もっぱらイレーネ・ワイデマイヤーの仲介とされているが、尾崎の供述に出てくる陳翰笙の役割も検証する必要がある。また、「唯一の生き残り証人」川合貞吉の証言の信憑性については、本日報告する渡部富哉氏をはじめ、日本で全面的な再検討が始まっている。周恩来・潘漢年ら中共中央特科との関係、李立山路線、顧順章事件、ヌーラン事件との関わり等は、今回報告する蔵志軍教授ら中国側の研究と史資料、英米諜報機関の上海租界工部局史料との照合が必要になるであろう。本シンポジウムが、「上海ゾルゲ団」についての新たな研究の飛躍点になることを期待する。

2 米軍対敵防諜部隊 (CIC) のシベリア 抑留帰還者に対する尋問記録から

今回の私の報告は、実在した「上海ゾルゲ団」「東京ゾルゲ団」の延長上で、マッカーシズム最盛期の米国陸軍情報部が、戦後日本で再建されたゾルゲ事件元被告らのネットワーク＝「戦後ゾルゲ団」を想定し、フレームアップしようとしていた形跡があることを、今夏米国国立公文書館で発掘した新資料にもとづき、問題提起してみたい。

私のゾルゲ事件研究は、もともと旧ソ連で粛清された日本人犠牲者発掘や戦中・戦後の日独関係・日米関係研究の副産物で、必要に応じて世界の公文書館で収集してきた第一次史資料によるものであるが、今回も、旧ソ連における日本人戦争捕虜の強制労働、いわゆるシベリア抑留帰還者をめぐる米ソ情報戦の研究の中で、新たに見出したものである。

2014年8月の私の米国国立公文書館調査は、主要にはシベリア抑留帰還者に対する舞鶴港などでの米軍CIC(対敵防諜部隊)の尋問記録(1946-50)に集中した。予想通り、米国側資料は充実していた。陸軍情報部の対敵防諜部隊CICが主として作成した個人監視ファイル(IRR Personal Files)全885ボックス中370ボックスしかみられなかったが、約300人分の抑留帰還者尋問記録を集めることができた。

これまで無名の人々故に収集を先送りしてきた日本人記録約1800人分中の9割は、尋問原票を含む抑留帰還者の監視記録であることが判明した。それも、抑留記録の無差別収集ではなく、旧特務機関・諜報関係者、民主運動・日本新聞関係者、少しでもロシア語のわかるもの、通訳・翻訳に従事したものらが「Project Stitch(縫い物作戦)」のCategory Aとされたファイルで、ほとんどに「PSA(Possible Soviet Agent=ソ連エージェントの可能性)」と記され、帰国後も長く監視されていることがわかった。

また、NHK樺太局アナウンサー石坂幸子ら樺太・千島からの引揚者は、抑留経験がなくても、密航などソ連事情に詳しいとして、PSAにカテゴリー化されていた。舞鶴・函館港などでのCIC尋問・嘘発見器の定型マニュアルのほか、抑留帰還者で後の愛知大学教授(ソ連法)胡麻本篤一のように「二重スパイ」として特別監視されている記録もあった。米軍への提出のため未公開の抑留帰還者体験記・手記類も多数収集できた。

これらをもとに米軍が解析したRG319「Project Stitch」総括報告書は、既に名越健郎氏(当時時事通信ワシントン支局長)により紹介されており(「シベリア帰還者から『スパイ』352人摘発」『毎日新聞』1999.9.21、「GHQ、全土でソ連スパイ狩り」『時事解説』2001.10.9)、加藤も一昨年IRR Impersonal Filesとして収集済みである。ただし、ソ連・中国・朝鮮の戦略爆撃目標設定のための、米国空軍による地誌情報収集の尋問記録、RG341「Project Wringer=絞り作戦」ファイルは、およそ1万人分があると思われるが、サンプル調査を試みた段階である。

『ゾルゲ事件』で述べたように、占領期の米国陸軍情報機関(ウィロビー將軍のGHQ・G2、キャノン機関など)は、尾崎秀実・宮城與徳関係の情報を死後も幅広く集めていたほか、敗戦直後に釈放されたマックス・クラウゼン、元被告川合貞吉、秋山幸治、山名正實、田口右源太らの個人ファイルを作っ

で監視していた。川合ファイルからは、彼が 1949 年 2 月米陸軍のウィロビー報告発表直後から、米軍から月 2 万円の報酬を得てゾルゲ事件と日本共産党内部情報の提供者になっていたことが判明した。日本の特高警察記録に出てこない、戦前ドイツ連合通信 DNB 東京支局石島栄もゾルゲ事件関係者としてファイルされていた。旧満鉄調査部関係者では、中西功、宮西義雄、安藤次郎、後藤憲章らも、同様に米軍の監視下にあった。

3 「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイル 中に「戦後ゾルゲ団」を想定した謀略

今回とりあげるのは、シベリア抑留にも関連した「第二のゾルゲ事件」「戦後ゾルゲ団」ともいうべき大がかりなフレームアップが、サンフランシスコ講和後、朝鮮戦争末期の 1953 年 1-8 月頃、具体的に密偵され企図されていた事実である。ちょうど国会での鹿地亘・三橋正雄事件審議と平行し、ラストポロフ事件の直前における、200 人に及ぶソ連スパイ団摘発工作である。中心人物「Ito Masao (伊藤雅夫)」自身が、ゾルゲ事件関係者と想定されていた。しかもそこに、田口右源太、山名正實という戦後釈放されたゾルゲ事件被告、日本側資料にはないが米国側がゾルゲ事件関係者と疑った元 DNB 記者石島栄 (高田信二『「ゾルゲ事件」——70年間誰も知らなかった謎の人物・石島栄』、日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』第 35 号、2012/12 参照) が関わったとされた。米国でウィロビー報告がまとめられ、その福田太郎訳『赤色スパイ団の全貌』(東西南北社、1953) 刊行時で、対ソ情報戦に使えると判断されたものだろう。

問題の資料は、米軍 CIC 収集の「伊藤雅夫とその仲間たち (Ito, Masao and Associates)」という全 5 冊約 600 頁の大きなファイルで、シベリア抑留帰還者とも関係する。1953 年 2 月 26 日 CIC 報告に、「伊藤雅夫は 1941 年 11 月 29 日にゾルゲ諜報団との関わりで検挙され拘留後釈放された」が、戦後は在日ソ連代表部イワノフ陸軍大佐の専任運転手

で対日諜報に従事、とある (資料 1・資料 5)。ファイルされた理由は、伊藤情報中に「1953 年 1 月 13—20 日に全国在日ソ連諜報員会議が開かれた」という情報があったため、そこから全国的な該当者・候補者調査が始まり、全体総括図 (資料 2) のような、全国 200 人規模の一大ソ連スパイ団があると想定され、独立直後の日本警察による摘発が検討された。

中心人物は、樺太出身で、日本敗戦時に朝鮮半島に連行され、朝鮮・平壤の抑留収容所で諜報訓練を受けたという伊藤雅夫のほか、伊藤と戦前樺太でつながる北海道のソ連スパイ今福太郎 (札幌・北海道秘密探偵社)、樋口義郎 (元樺太新聞記者、郷土誌『帯広・十勝』編集長)、それに、ゾルゲ事件元被告田口右源太 (戦後共産党十勝地区委員長など)、の 4 人とされている (資料 2・資料 3)。

その背後に、日本共産党北海道委員会西館仁ら、密航船第一喜勢丸 (飯塚一夫船長) ら漁業・船員関係者 (樺太・千島・朝鮮への密航)、抑留引揚者団体 (ソ連、樺太・千島、朝鮮)、朝鮮戦争中の在日朝鮮人運動 (朝鮮青年行動隊)、中国共産党との連絡網があり、資金提供の財源及びカバーとして、札幌の佐々木組 (佐々木清)、函館の阿部組 (阿部鶴松)、国策パルプ (戦前共産党「転向」者の水野成夫・南喜一らの製紙会社、「青木貞吉」が田口右源太に資金援助と出てくるが、「青木」は田口と同じくゾルゲ事件被告とあるので「川合貞吉」の可能性が強い、資料 4)、神戸新開地の福寿公司、神戸博愛病院 (華僑の鄭義雄創設) などがあげられた。

関係者として、田口右源太の線から山名正實 (戦前は三田村四郎・久津見房子夫妻のもとで共産党・農民運動、占領期に共産党初の女性国会議員で同じくゾルゲ事件で検挙された柄沢とし子=武田とし子の夫)、石島栄 (戦後共産党北海道委員会農民部長) らゾルゲ事件の生き残り、今福太郎・樋口義郎の線から北海タイムス、札幌新聞、室蘭日報等の記者たち、淡徳三郎ら抑留帰還者、それに、国警東京

地方本部作成の全国200人以上の諜報員実名名簿が繋がっていると推論され、監視された模様である。ソ連のUB Line 工作（資料5）、NO 機関、H 機関（三国機関、猪俣浩三『占領軍の犯罪』図書出版社、1979年にも鹿地・三橋事件がらみで登場）などの工作・機関名も出てくる。つまり、伊藤・田口・山名・久津見・柄沢・石島という6人のゾルゲ事件関係者が、広い意味でのソ連スパイ団の一部として登場する（ただし、私の解説では伊藤雅夫は実際には無関係、後述）。

「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイルを読み込むと、米軍対敵防諜部隊 CIC によるこの調査のきっかけは、1953.1.8 に情報提供者(Informant) からもたらされた、1953.1.13-20 に全国在日ソ連諜報員会議が、東京以外の各地で、クーリエ（連絡員）のネットワークにより召集され、日本人指導者により、①諜報員の配置、②暗号・コールサインの変更、③義務的コードサインが決定されるという情報で、この指令は、ソ連から樺太・北海道ルートでもたらされたという（資料1）。この情報の情報源が探られ、中心が「ITO」という人物だということで、当初は抑留帰還者ら何人かの「ITO」が候補として浮上し（共産党潜行幹部・伊藤律は入っていない）、1953.2.26に「伊藤雅夫」と特定された。

その最初の「伊藤雅夫」情報に（資料1）、①1941.11.29 ゾルゲ事件で検挙、不起訴保釈、その後ロープ販売業（田口右源太の検挙時職業と同じ）、②1947-49 ソビエト代表部イワノフ大佐の専任運転手、③1952.11 中島かずまさ（別名やたべ・りょういち）からの情報に、伊藤雅夫は1952.11.20に北海道根室から樺太に密航し、53.4-5月に日本に戻ってくる予定、樺太から30-40人の非合法グループが日本に入っている、④この樺太グループの中心が、北海道秘密探偵社勤務で現住所小樽市緑町の今福太郎（こん・ふくたろう）で、本籍樺太・大泊で1915-47 樺太育ち、英語・ロシア語がわかり、1929 札幌新聞社会部ほかジャーナリスト、大泊土

建組合、1944 佐々木組に入り、45 かがわ缶詰工場支配人、大泊興信所を作って樺太在住日本人の密航帰国を組織、その資金は札幌・佐々木組の息子佐々木清から出た、⑤今福太郎の指導者がソ連諜報員の樋口義郎、今と共に北海道秘密探偵社を興した責任者で、元樺太新聞記者・文筆業で郷土誌『帯広・十勝』主筆、以後、この今福太郎と樋口義郎の探索から、この諜報団と日本共産党をつなぐ中心人物として、樋口の帯広・十勝での友人でゾルゲ事件元被告田口右源太（53年には横浜に移り生活協同組合勤務）が浮上、北海道共産党の指導者田口右源太の調査から、50年分裂時の北海道委員長西館仁、田口の友人で同じくゾルゲ事件被告だった山名正實（資料6）、農民運動指導者・石島栄（CICはゾルゲ事件関係者と認識）にもつながった。

ただし、田口右源太、山名正實、石島栄ら北海道のゾルゲ事件関係者の占領期の動きは、1949.2 ウィロビー報告のために47年頃からCICによりファイルされていたが、1953「伊藤雅夫ファイル」時点では、詳しく参照されていない。したがって、「山名正實ファイル」1950.8.11で、1950年共産党分裂時に山名が「志賀意見書」を暴露した野田弥三郎グループに従い除名された際に山名と離婚したとされる衆議院議員・柄沢とし子（旧姓武田とし子としてゾルゲ事件で検挙され不起訴、50年国際派、後に共産党幹部松島治重と結婚）、および、山名の戦前からの同志三田村四郎の妻久津見房子（ゾルゲ事件被告）の名は「山名ファイル」にはあるが、1953年「伊藤雅夫ファイル」には登場しない。

「伊藤雅夫」の探求で、彼が北朝鮮抑留中にソ連の工作人員として訓練され指令を受けた帰還者として1946.6に日本に帰国したと判明した。ただし、「ゾルゲ事件で検挙・不起訴」の履歴情報は次第に消え、41年満州で関東軍入隊、自動車部隊所属、北朝鮮第一人民教習所で諜報訓練など、ソ連・朝鮮との関わりが重視された。ここから朝鮮戦争時の在日朝鮮人運動（朝鮮青年行動隊＝祖国防衛隊）、神戸の福

寿公司・神戸博愛病院を中継点とした在日華僑と中国共産党との繋がり、在日ソ連代表部のシベリア抑留帰還者を用いた諜報工作、北海道共産党の西館仁らに調査が広がり、総括図のようなネットワークを持つとされた。

その構成員・財源等の情報から、1953.2 国警東京作成の、女性を多数含む怪しげな全国諜報員名簿まで作られ、結びつけられた。国警東京作成諜報員名簿には、HEISO =北朝鮮関係38人、SEMO =ソ連関係56人、CSEM =中共関係26人、YOTE =在日ソ連代表部直轄指導者7人計127人の住所つき実名リストが出てくるが、その信憑性は薄弱である。これに 1952.10 作成の所属・住所不明87名の実名リストを加えると214名となるが、この日本人リスト中女性名が3分の1の70人に近く、朝鮮戦争時のソ連の実践的な対日諜報ネットワークとしては、不自然に思われる。

名越健郎前掲論文によると、米国陸軍諜報部はシベリア抑留帰還者に対する尋問「Stitch Project」によって、ソ連スパイ352人を割り出し、内138人がスパイ工作を受けたと自白し、その中の32人が帰国後ソ連当局から実際に接触を受けたという（Project Stitch 総括文書、1952.12）。この352人と「伊藤雅夫ファイル」中の214名リストがどれだけ重なるかは定かでないが、米軍は、抑留中の忠誠誓約によるソ連の帰還者工作は帰国後に脱落者が続出して失敗したとみなし、「多くのスパイが活動中止を誓約したり、二重スパイになった」とも述べているので、「戦後ゾルゲ団」は、抑留帰還者を含むが、同時に朝鮮戦争中の在日朝鮮人・中国人、それに、日本共産党員やゾルゲ事件残党により再編成されたものと想定していた、と考えられる（資料5）。

4 米軍エージェント川合貞吉と山名正實を使った田口右源太への「二重スパイ」工作？

重要なのは、田口右源太の活動資金調査で、1952.11 に国策パルプ（水野成夫・南喜一）が「青木貞吉」を通じて田口に資金援助を与えたという情

報が出てくることである。そこでは「田口と青木は戦争中ゾルゲ・スパイ団として共に長く獄中、戦後釈放」とされており（資料4）、この「青木貞吉」は、「川合貞吉」のことと思われる。川合は、元日本共産党幹部で「転向」した水野成夫・南喜一が作り旭川工場を持つ国策パルプとつながる。

拙著『ゾルゲ事件』で詳述したように、川合貞吉は、1949年2月にはウィロビー、キャノン機関のエージェントとなっている。そのため米軍記録には「青木」と偽名で記録されたとも考えられ、田口・山名ら他のゾルゲ事件関係者・共産党員を「二重スパイ」にするための工作に、川合貞吉と国策パルプ、三田村四郎の反共労働工作が関わったことを示唆している。コミンフォルム批判による日本共産党の50年分裂は、ソ連 KGB・GRU にとっても、米国 G2・CIA にとっても、「日本人スパイ」「二重スパイ」獲得の絶好の機会であった。

CIC「山名正實ファイル」には、ゾルゲ事件元被告の山名正實を、1947年9月29日に民間検閲局（CID）のマスター監視リストに移し、「ゾルゲ事件」残党として本格的監視下におく記録がある。これは、『ゾルゲ事件』で述べた「川合貞吉ファイル」の場合と全く同時で、G2のウィロビー、キャノン機関が、山名を米軍エージェントにする可能性を探っていたと考えられる。ただし山名は、川合とは異なり上海での活動歴がないため、49年2月ウィロビー報告発表時には、ゾルゲ・尾崎・スメドレー会談を証言できると称した川合の場合のような、露骨なエージェント工作を受けることはなかった。また、この時点で川合と山名が連絡をとった形跡はなく、双方の個人ファイルに相手の名は出てこない。

ゾルゲ事件被告山名正實は、戦前からの北海道農民運動の活動家で、三田村四郎（獄中転向幹部）・久津見房子（ゾルゲ事件被告）夫妻に近かったが、45年釈放後は、北海道で田口右源太・石島栄らと共に共産党再建に加わり、共産党初の女性国会議員柄沢とし子（ゾルゲ事件で検挙・不起訴となった旧姓武

田とし子)の夫となっていた。

だが、コミンフォルムによる日本共産党批判で同党が分裂すると、山名は50年5月に野田弥三郎らの「国際派」に加わったとして除名された、と米軍は記録している。同じく「国際派」だが、宮川寅雄に近い柄沢とし子とはその頃離婚した(柄沢は55年六全協で共産党に復帰、幹部の松島治重と再々婚)。CICによれば、二人の離婚は党路線の違いによるもので、以後、山名は復党することなく、もともと入党推薦者であった三田村四郎の反共組織「三田村労研」に加わった(平沢是広『汚名——ゾルゲ事件と北海道』北海道新聞社、1987、荒井英二「わが地方の進歩と革命の伝統：北海道」『前衛』1973/4)。

1953年時点での山名正實は、国策パルプ(水野成夫・南喜一)及び三田村四郎を介して、すでにG2/CIA エージェントとなった川合貞吉と結びつく可能性があり、CICが川合の本名を隠した「青木」名での田口右源太への資金援助情報(資料4)は、水野・南・三田村をスポンサーにした川合貞吉と山名正實の合作による、同じゾルゲ事件被告田口右源太の「二重スパイ」抱き込み工作であったと考えられる。

しかし、田口右源太は、真面目な共産党活動家で、米軍・内閣調査室・公安調査庁(の日本人エージェント)の誘いにはのらなかった。六全協を機に共産党を離れたが、横浜の生活協同組合運動から出発してビジネスマンとして成功し、「戦後ゾルゲ団」にも関わらず、三田村・山名グループにも加わらなかった(平沢『汚名』)。田口・山名と戦後農民運動で一緒だった石島栄は、六全協後も共産党に忠実で、上京して洋書販売ナウカ社の役員になる(前掲高田信二論文)。

なお、山名正實の50年党分裂後の軌跡＝三田村四郎・川合貞吉への接近の有力な傍証として、1954.9.27日本共産党による「神山茂夫除名決定書」があり、信憑性は定かでないが、**神山派と兎玉**

誉志夫・遠山景久を介した**川合・山名・三田村四郎の繋がり**が出ている(法政大学大原社会問題研究所『日本労働年鑑』第28集、1956年版)。

ただし、この事件の中心人物「伊藤雅夫」情報自体が曖昧で、履歴情報が数種類あり、現住所も不明とされている。当初の「ゾルゲ事件で1941.11.29検挙」(みすず『現代史資料』等の記録には該当者なし)という履歴(資料1)は途中で消えて、戦時は満州で関東軍勤務、トラック運転手、などの異なる情報が出てくる。「伊藤雅夫ファイル」中で共通するのは、樺太出身、戦後朝鮮半島で抑留、対日諜報訓練を受けて後46.6帰国、ソ連代表部専任運転手というものだが、実際にゾルゲ事件と関係があったか、全国組織の大物幹部であったかは疑わしい。1953年9月には、この大規模スパイ団の情報は、断片的情報の積み上げのみで信憑性に疑問があるというCIC内の内部意見も出てくる。現在の所、「上海ゾルゲ団」「東京ゾルゲ団」の後継の「戦後ゾルゲ団」と想定されたが、証拠不十分でフレームアップできなかった「第二のゾルゲ事件」だった可能性が大きい。また、これまで私が収集した田口右源太、山名正實、石島栄、淡徳三郎らの個人ファイルに1953年のこの事件は出ておらず、「伊藤雅夫ファイル」には伊藤律や白鳥事件関係者も全く出てこない。

いうまでもなく、この時期は東西冷戦、中国革命・朝鮮戦争、米国マッカーシズム、ソ連スターリン没・水爆実験、日本の独立・再軍備・保守合同、それに日本共産党の50年分裂・暴力革命・中核自衛隊・山村工作隊・トラック部隊・人民艦隊の時期で、春名幹男『秘密のファイル』(新潮文庫)に出てくるように、**米国の対日諜報では、マッカーサー解任、サンフランシスコ講和条約に伴い、GHQ・G2ウィロビーからCIA極東支局に主導権が移る時期**である。東西冷戦は、日本国内でも米ソ双方から多くの謀略・スパイ工作を生んでいた。松本清張、吉原公三郎、大野達三らが好んで描く「日本の黒い霧」の舞台である。

北海道は、対ソ諜報の最前線でゾルゲ事件関係者も多く（平沢是広『汚名——ゾルゲ事件と北海道』北海道新聞社、1987）、白鳥事件、関三次郎事件等反共・密航船がらみの謀略も渦巻いていた。北海道 CIC 責任者で辣腕をふるい、下山事件関連でも顔を出すジョージ・カーゲットがウィロビーの G2 から CIA 文書調査部に移る時期であり、延禎『キャノン機関からの証言』（番町書房、1973）が挙げる様々な工作があった。毎日新聞旭川支局記者佐藤哲朗『北海道戦後謀略史の証言』上下（太陽、1979）、北海道新聞記者小池洋右『潜行——米ソ情報戦と道産子科学者』（北海道新聞社、1997）、同『日本人狩り——米ソ情報戦がスパイにした男たち』（新潮社、2000）等が系統的に追跡してきた問題で、白鳥事件のからみで今西一教授、手島繁一・慶子夫妻がインタビューしてきた世界と重なる（今西一・手島繁一・手島慶子「水落恒彦氏に聞く（1）（2）」小樽商科大学『人文研究』第 124・126号、2012/2013）。

「伊藤雅夫ファイル」中の 1952 年 10 月 CIC 報告によると、ソ連が当初企図したシベリア抑留帰還者中心の UB Line 工作は、抑留時の忠誠誓約を破って帰国後脱落するケースが続出し、新たに在日朝鮮人をも含めた諜報網を再構築しようとしているとあり、そのグループ再編を「伊藤雅夫とその仲間たち」として追及したものと思われる。そこに田口右源太、山名正實、石島栄らの名も出てきたので、「第二のゾルゲ事件」「戦後ゾルゲ団」の網をかけようとしたが、独立したばかりの日本の法体系では立件が難しく、日本の警察に起訴を委ねることを断念、そこに当時緊要の「スパイ防止法」立法化のために使える 53 年 8 月稚内の関三次郎・クリコフ事件（『北海道警察史 昭和編』1968, pp.757-770. ソ連監視船拿捕から発覚、CIC「関三次郎ファイル」に 1955 年警察庁警備部作成の外事警察資料第 1 巻第 2 号「関三次郎及び P・K1403 事件」が入っている）、54 年 1 月にはラストボロフ事件（警視庁公安

部作成「部外秘 外事警察資料」1969/4 には、ソ連代表部 KGB 要員ラストボロフが米国 CIA に寝返ったさいに供述した日本人エージェント 36 人の実名があるが、そのうち半分近くの CIC 個人ファイルが IRR に入っている）が発覚し、より権力中枢に食い込んだソ連スパイ事件として、対ソ諜報のターゲットをそちらに移したと推定できる。

5 おわりに——ゾルゲ・尾崎秀実が夢見た「スパイ」が死語となる世界

以上の「伊藤雅夫とその仲間たち」ファイルの暫定解説をまとめてみよう

第一に、米国陸軍情報部は、1952 年 4 月のサンフランシスコ講和条約による日本の独立後も、日本、特に北海道を「ソ連スパイ」の潜入先と見なし、占領期の要注意人物監視ファイルを保存し再ファイルして、多くの無名の人々を含む日本人の監視を継続していた。しかも、1953 年頃には CIA が加わる。日本の国家地方警察・公安調査庁・内閣調査室等も協力し、手足として使われており、ことインテリジェンス・防諜戦に関する限り、日本の独立は無きに等しかった。ただし一応独立したので、超法規的な摘発はできなかった。米軍による日本人サーヴェイランスとファイリングは、占領が終わっても米軍基地内の CIC によって続けられ、沖縄・本土に米軍基地は残されているから、今日まで続いていると考えられる。

第二に、ソ連の対日諜報活動は、1944 年ゾルゲ・尾崎秀実の処刑後も、実際に続いていた。特に敗戦時の戦争捕虜名目でのシベリア等全土への日本人抑留者 60 万人には、過酷な強制労働、『日本新聞』、「民主化運動」によるイデオロギー的洗脳のみならず、優先帰国の利益誘導によるスパイ工作が行なわれた。それは、ドイツ人捕虜 240 万人、ハンガリー人 50 万人の中からの選抜者による東欧共産主義政権樹立工作と並んで、ソ連赤軍・KGB による大規模な冷戦型インテリジェンス活動を意味した。ただし日本人捕虜の場合、帰国（ダモイ）のためにや

むなくスターリンへの忠誠を誓う面従腹背がほとんどで、帰国後の「脱落者」が多く、実際にソ連とマルクス主義を信じ、日本共産党員またはソ連の対日・対米諜報員として活動するケースは希であった。

その抑留帰還者「脱落」には、帰国時の米軍による嘘発見器を使った容赦なき尋問・監視、帰国した日本での郷里・家族・求職活動における「抑留帰還者＝アカ」という差別・抑圧と、ソ連「社会主義」の真実を実体験で知った帰国者たちの家庭や職場での証言が、大きな役割を果たした。そのため、鹿地亘監禁事件の証言者三橋正雄、ソ連代表部員ラストボロフとその日本人エージェント（多くが抑留帰還者）に見られるように、ゾルゲや尾崎秀実に匹敵する強固な思想に裏付けられた「スパイ」協力者を産み出すことができず、せいぜい野坂参三のような共産党内の風見鶏エージェントを作るにとどまった。

ただし、上海でのゾルゲの助手で、ソ連の核開発に大きな役割を果たしたウルズラ・クチンスキー（ハンブルガー夫人、党名ソーニャ、マンハッタン計画の原爆スパイ＝クラウド・フックスを英国で獲得）や、ラストボロフ事件に関与した外務省の泉顯蔵（日ソ中立条約締結に直接関与）が、今日「ゾルゲ以上のソ連スパイ」と評されるように、「事件」として表面化し検挙されなかったソ連諜報員が存在した可能性も否定できない。レフチェンコ事件（1979）の際は、自民党石田博英労相、社会党勝間田清一委員長らの名も「KGB エージェント」として名を挙げられた。

第三に、ゾルゲ事件は、冷戦期の諜報合戦のなかで、主として米国陸軍情報部ウィロビー將軍らにより「20世紀最大のスパイ事件」に仕立て上げられ、そのイメージが一人歩きしていった。日本共産党が「伊藤律スパイ説」などでそれを裏側から補強し、ソ連が1964年にゾルゲを公式に「大祖国戦争勝利の英雄」と認めまつり上げることにより、国際的に認知された。戦後初期に尾崎秀実の獄中書簡『愛情はふる星の如く』がベストセラーになったような、

情報・言説を駆使しての反戦平和のための抵抗イメージは後景に退いた。

冷戦下で米ソの諜報活動が明るみになると、それがゾルゲ事件に比べてどこまで権力に肉薄していたか、どのような暗号・連絡手段を用い、どれだけ情報戦に役立ったかが問題になり、その都度**ゾルゲ事件が一つの引照点**とされた。イギリスのプロヒューモ事件（1962）、西ドイツのギョーム事件（1974）、アメリカ CIA の原発導入正力松太郎工作や自民党への資金供与、等々が、今日では知られている。

ただし、グローバル化やインターネットの普及で、情報戦がエシュロンやウィキリークス、スノーデン内部告発の水準に達すると、ゾルゲ・尾崎のような個人の役割（ヒューミント）や思想的使命感の意義は、希釈された。21世紀に入ると、ビッグデータの収集・解析や IT 技術開発、軍勢力・経済力に加えて外交・文化のソフトパワーが重要になった。私がアントニオ・グラムシに学んで、「**19世紀機動戦・街頭戦、20世紀陣地戦・組織戦から、21世紀は情報戦・言説戦の時代へ**」と提唱するのはこのような意味であるが、巨大国家の情報独占・情報操作に対して、民衆がどのように個人の人權、言論・思想の自由、立憲主義と熟慮民主主義を立脚点として対抗し、**スパイや謀略の必要のないグローバルな市民社会**、民族や宗教を超えた平和を構築するかが問題になる。

本報告で分析した米国陸軍情報部の対敵防諜部隊 CIC は、Counter Intelligence Corps の略語で、敵国のスパイ摘発を主たる任務としたが、今日では別の意味で、国家機密や戦争勢力の企図を暴き出す、**民衆的 Intelligence**、**情報公開のための Counter Intelligence** が必要になる。リヒアルト・ゾルゲや尾崎秀実は、戦争回避・世界平和を求めて情報戦に加わり、70年前に処刑された。**彼らの活動を支えた信念は、国境のない世界共和国の夢だった**と思われる。没後100年を迎える21世紀半ばには、「スパイ」という職業や言葉が無意味になるような世界を展望し、期待していたに違いない。

資料 1

資料 2

資料 3

資料 4

資料 5

資料 6